



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イギリス・マナー体制下の農家構成とその規模に関する史料：リンカンシャー在スポールディング小修道院領の13世紀後半作製の戸籍
Author(s)	篠塚, 信義
Citation	北海道大学人文科学論集, 4, 26-48
Issue Date	1965-02-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34280
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_PL26-48.pdf



イギリス・マナー体制下の農家構成と その規模に関する史料

——リンカンシャー在スポールディング小修道院領、
13世紀後半作製の戸籍——

篠塚信義

ここに刊行しようとする史料は、ハラム (H. E. Hallam) によって発見された、リンカンシャー在スポールディング小修道院領の13世紀後半(1268～9年前後)に作製された戸籍である。この種の史料は農民経済の実態を究明する上では極めて重要なものであるにも拘らず、イギリス中世にあっては、当スポールディング戸籍以外には全く発見されていない。欧米学界においても、後述するごとく吾々とは全く異なった観点からではあるが、農民の家族構成や農家の労働力構成といった問題に注意が向けられつつあるのであるが、当戸籍はこうした点について直接手がかりを与えてくれる史料であるために、その解釈をめぐる発見者であるハラムとラッセル (J. C. Russell) との間には激しい論争がひき起されている。従来必ずしも本格的に問題とされてこなかった封建社会のもとにおける農家経営について再検討をする必要があることはすでに述べたところであるが¹⁾、このことは別にしてもこの問題について研究をすすめることは、欧米学界の現状を見るとき重要な意味をもっている。

最近欧米学界で有力になりつつある人口統計学 (demography) の分野において最も権威あるものとされている「イギリス中世人口」(British Medieval Population, 1948)の著者であるラッセル (J. C. Russell) は、本著書においてイギリス中世農民は近代社会の核家族 (nuclear family) と同一の構成をとっていたこと、そしてその規模は平均するならば3.5人であることを唱えてい

1) 拙稿、「マナー社会と雇傭労働者」、史学雑誌、第72編、第3号所収。

る。これは、吾々の目からするならば全く非歴史的な所論なのであるが、実際にはこのラッセルの所説は、イギリス経済史学界で大きな影響力をもっているポスタン (M. M. Postan) によって、歴史変動の基本的動因を人口変動に求めようとする一連の研究において、実証的根拠として用いられているのである¹⁾。しかしながら、ラッセルの人口数とその変化に関するデータは、1086年のドゥームズディ・ブックの時点においても、マナー最盛期たる13世紀にも、かつ又それ以降のいずれの時代にあっても、農民家族の規模を3.5人であるという前提の下に得られた数値なのである。こうした方法がおそらく非科学的であることはコスミンスキー (E. A. Kosminsky) がポスタン批判にさいして展開しており²⁾、およそ120エーカーの面積をもつ1ハイド (hide) 保有民が数多く占めているドゥームズディ・ブックの時点の農民と、その約1/4の大きさの1ヴァーギット (virgate) が一般的である13世紀の農民とが、同一の家族構成をとったとは到底考えられないことを指摘している。しかしコスミンスキーもまた、史料の欠如のゆえにこれらの各時代における家族構成や規模を確定することが困難であることを指摘せざるをえなかった³⁾。

ところで、ラッセルの研究が世に問われた数年前の1941年にはすでに、アメリカの歴史社会学者ホームズ (H. G. Homans) が、マナー体制下の農家構成に関するすぐれた研究を発表していた⁴⁾。

ホームズは豊かな史料を以てうらづけながら、農民の家構成 (household) と家族 (family) とは別個であるとし、前者は家族よりはるかに大きなものであることを結論づけたのである。しかるに、ラッセルはこのホームズ

1) M. M. Postan, "Some Economic Evidence of Declining Population in the Later Middle Ages", *The Economic History Review*, 2nd ser., II, no. 3, 1950.

2) イエ・ア・コスミンスキー, 「14世紀ならびに15世紀はヨーロッパ経済の衰退期であったか」, 山岡亮一・福富正実編, 「資本主義への移行論争」所収。E. A. Kosminsky, *Peut-on considérer le 14^e et le 15^e siècles comme l'époque de la décadence de l'économie européenne?* Studi in onore di Armando Saporì, I, p. 566. 但し後者では前者ほど詳しく論ぜられてはいない。

3) Kosminsky, "The evolution of feudal rent in England from the XIth to the XVth centuries", *Past and Present*, no. 7, 1955.

4) G. C. Homans, *English Villagers of the Thirteenth Century*, 1941.

ズの研究を全く無視しており、自説を展開するに当ってホーマンズの所説に対する批判すらも行なっていない。だから、クラウス (L. Krause) によってその研究史無視の態度や史料操作の非科学性が鋭く批判されるに至ったのは当然だと云わねばならない¹⁾。

こうした事情を考慮すると、ラッセルの3.5人の核家族という考え方が必ずしも説得力あるものでないことは一応いいうるのであるが、にも拘らず、これ迄直接の史料的根拠を以ってその当否をたしかめることは不可能な状態にあった。ここに、スポールディング戸籍がハラムによって発見され、その分析結果が「13世紀の戸籍」として「経済史評論」に発表されたのである²⁾。本論文がやがてラッセルとの論争をひき起すところとなったのもこれまた当然であつたといえよう。ここで当論文の内容凡てについてふれる必要はないし、その余裕もない。幸い鵜川馨氏の詳細な紹介がある³⁾のでくわしくはこれにゆずることにして、ここでは吾々にとって最も重要と思われ、後にラッセルとの論争の焦点ともなる農家の構成と規模に関する点のみとりあげることにとする。

ハラムは規模については次表の如く、ラッセルの3.5人よりも大きな数値をえているが、つづけて次のようにのべている。「通常の家族 (household) は

Table 1

manor	bond household	bond inhabitants	size of household
Weston	54	236	4,37
Moulton	85	401	5,72
Spalding	113	543	4,81
total	252	1180	4,68

- 1) L. Krause, "The Medieval Household ; Large or Small?" *The Economic History Review*, 2nd ser., IX, no. 3, 1957.
- 2) H. E. Hallam, "Some Thirteenth Century Censuses", *The Economic History Review*, 2nd ser., X, no. 2, 1957.
- 3) 鵜川 馨, 「中世家族についての史的研究の一動向」, 立教経済学研究, 第12巻, 第2号, 昭和33年.

Table 2

no. of persons	Weston	Moulton	Spalding	total
1 person	2	5	3	10
2 persons	9	6	3	18
3 "	9	14	20	43
4 "	14	24	25	63
5 "	9	11	27	47
6 "	2	11	18	31
7 "	3	5	9	17
8 "	2	2	6	10
9 "	2	2	1	5
10 "	1	2		3
11 "	1	1	1	3
12 "		1		1

男とその妻及び子供とからなっており、3代にわたったり未婚の兄弟や姉妹が婚姻関係にある兄弟の許にとどまったりする大きな家族 (large household) や、逆に寡婦や独身の兄弟・姉妹のみでなりたっている小家族 (small household) もまた一般的ではなかった。」従って「これら〔の数値〕がラッセル博士が主張している一戸当り 3.5 人という値からかけ離れており、クラウス博士の見解を支持している」としても、「〔このことは〕この家族がラッセルの説いているところの核家族 (nuclear household) 以外のものであることを意味するものではない。ウェストン (Weston)、モウルトン (Moulton) 及びスポールディング (Spalding) の戸籍はこのことを完全に支持している。再保有農 (sub-tenants)、共同相続人 (parceners)、隠退した父親、未婚の兄弟姉妹 (siblings)、奉公人、寡婦となった母親といった人々をホームズ博士が発見することを助けた土地調査帳が存在するにしてもそう云えるのである」と結論づけた。

ラッセルの家族論は、その構成に関しては裏づけられ、規模はより大きなものとして拒けられた。しかしラッセルは 1962 年に同じく「経済史評論」紙上

で、「スポールディング農民名簿の人口統計学的諸制約」¹⁾として反論を行なった。ラッセルによるならば、ハラムは到底認め難い4つの前提を設けた上で推論を行なっている。そしてこの4つの前提は、これを認めないならばハラムの得た数値よりもはるかに小さな家族規模を結論づけるごとき性質のものである。それならばハラムの設けている4つの前提とは何か。それは、(1) 筆頭人とその子供によって構成されているそれぞれのグループは常に一つの家族 (household) を意味する。(2) 筆頭人はすべて婚姻状態にあり妻を有している。(3) ウェストン、モウルトンの場合とは記載内容を異にするスポールディング戸籍に現われている子供はすべて父と同居している。(4) これらの戸籍は当該マナー或いは村の平均家族規模を算定する上で代表的示例と見做しうる。というそれぞれの点である。

先ず第一の点について。ある筆頭人の息子（或いは娘）として現われながら、「彼は土地を保有している」(tenet terram, 或いは tenens terram) と記述されている場合、[かかる例は Weston では no. 11, 13, 14, 18, 19, 21, 23, 29, 37, 48, 49, 54, Moulton では no. 1, 22, 41, 44, 48, 75, 89, 92 に見える——筆者。以下同じ。] この息子は父親の世帯から独立し別個の世帯をつくっていたことは明瞭である。現にかかる息子が自ら別の戸籍筆頭人になっている例がある。[Weston : no. 14 と 15, 19 と 20, 21 と 22, 29 と 30, Moulton, no. 1 と 2, 1 と 3, 53 と 54, 53 と 55, 89 と 90, 89 と 91, 92 と 93, 92 と 94]。又、父の家から外に出ていることは疑うことができない浮浪人や聖職者をもハラムは父の世帯に含めている。従って同一戸籍に2個以上の世帯が含まれて記述されている場合もあることは明らかである。これら息子が父とは別個の世帯を構成している場合を父とは別個に計算するならば、仮にハラムの第二の前提である、筆頭人はすべて妻を有しているとの仮定を認めたとしても、Weston では3.67人、Moulton では4.65人となる。

しかもすべての筆頭人が妻を有していたとはいえない。何故ならば、子供

1) J. C. Russell, "Demographic Limitations of the Spalding Serf Lists", *The Economic History Review*, 2nd ser., XV, no. 1, 1962.

について一部分は「母親と共にいる」(sunt cum matre) と述べられているが一部は「父親と共にいる」(sunt cum patre) と記されている。このように明瞭に父、母が区別されていることは、「父と共にいる」とある場合には母親がいないことを示すものと考えるべきである。[cum patre が見えるのは Weston: no. 8, 15, 20, 22, 24, 25, 28, 30, 36, 37, 39, 40, 41, 42, 45, 46, 47, 52, 56; Moulton, no. 2, 3, 6, 8, 13, 14, 15, 17, 18, 19, 30, 33, 34, 36, 37, 38, 39, 40, 53, 54, 55, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 70, 71, 72, 77, 81, 85, 86]。そう考えると Weston では3.3人, Moulton では3.82人と算定される。

第三に Spalding 戸籍の解釈について。ハラムの4.81人という数値は子供がすべて父の家に居住しているとすることによって得られたものである。ところが両親とその子供の合計は, Weston, 5.4人, Moulton, 5.9人と計算されるのに対し, 現実に家にいるのは Weston: 3.67人, Moulton: 3.3人なのであるから, 父と子供の総数がこれら2個村よりも少ない Spalding で家にいた者の数は, 3.67~3.3人よりも小となる筈なのである。

第四に, これらの戸籍は全農民の平均値を求める上に代表的例示となしうるかという問題。ラッセルは, この戸籍に現われているのは, より富裕な人人の割合が高く, 従ってより家族人数の多いもののみが現われているのだと主張して次表を提示する。

Table 3

	Sokemen	Operarii
Landholders 0 to 5 acres	21	0
” 5-30 acres	68	3
” over 30 acres	12	16
Percentage of those in survey who are also in census	15%	55.6%

そしてこのことは, 女性即ち寡婦が筆頭人となっている場合がこれらの戸籍では極めて少なく, 4%を占めるにすぎないことを考えるときより一層明瞭となる。黒死病以前の時期にあつては女性が保有者となっている割合は平

均 15% なのであるから、スポールディング戸籍のこのような低い比率は、より貧しく従って家族規模のより小さい者が出現することが稀であったことを意味する以外の何物でもない。むしろ本戸籍には相続人を有する富裕な者のみが現われていると考えるべきであり、従ってこれらをマナー全体、或いは村全体の代表的示例とは見做し難いのである。

結論として「結局、聖職者や未婚の人々の大部分が別個の小屋に居住していた社会にあっては、平均的に約 3.5 人という数値が妥当するように思われる」。このようにラッセルはハラムの家族規模に関する考察を全面的に否定した。ハラムの解釈はことごとく誤っていたのか。

翌 1963 年ハラムは「スポールディング農民名簿に関する再論」¹⁾ を書いてラッセルの批判点のそれぞれについて詳細な反批判を行なった。

第一の“tenet terram” 或いは“tenens terram” の解釈について。ハラムによればこの記述の解釈は“terra” とはいかなる土地であるかの問題に帰着する。ラッセルはこの土地を父親が保有していた土地とは別個のものと解しているが、これはハラムによれば父から相続した土地なのである。ホームズの研究によるならば、父の存命中に子供が土地を相続することは一般的だったものであり、これらの土地の大部分はこの相続地に相違ない。“tenet terram” と記述されている例が Weston では 20 例あるが、〔筆者の計算では 13 件、18 人〕、そのうち明瞭に父親が死している例が二つある。即ち、“Robert Harding; dead; Herbert holds the land; Elen with the mother” と “William Crombis came to the land, dead; William, who left the land; Geoffrey, who holds the land with his mother; Emecina, Emma, with mother”, である。〔前者は Weston, no. 18, 後者は Moulton, no. 48 であるが、いずれにも dead (mortuus) に相当する語句は見当たらない〕。そして「かかる事例のすべてについて私は息子を彼が生れた家の構成員として計算し、父の土地を相続することによって土地を保有しているものと考えた」という。〔しかし上記

1) H. E. Hallam, “Further Observations on the Spalding Serf Lists”, *The Economic History Review*, 2nd ser., XVI, no. 2, 1963.

の2例以外にも父が死亡していることを明記している例はない。]

それでは、ラッセルがあげている例のうち、その直後に自ら筆頭人として何人かの子供を有している場合はどのように解釈すべきであろうか。ハラムは Moulton, no. 53, 54, 55 の例を提示し、54 と 55 のそれぞれの筆頭人、Stephen と Lambert を、ラッセルは 53 の筆頭人 Reginald の息子である Stephen と Lambert と同一人物達とみなしている。しかし、53 の息子達 2 人は父親の許にとどまっていることが明記されており (cum patre), 別個の家族をつくりうる状態になかったことは疑うことができない。そこで土地台帳で土地保有状況をみると、54, 55 それぞれの筆頭人 Stephen と Lambert は Reginald の息子達ではなく、甥であることが判明する。すなわち 53 の筆頭人 Reginald は、54 Stephen, 55 Lambert 及び Geoffrey なる 3 人の父親に当る人物の兄弟として、これら 3 人の父との間に土地を分割して相続し、しかもこの Reginald は自分の子供 3 人のうち 2 人に、甥達と同じ名前の Stephen と Lambert とつけたのである。すなわちラッセルが同一人物としてあげている者のなかには同名異人が含まれているのだと反論する。[しかし、53, 54, 55 の場合はともかくとして、かかる例の大部分についてハラムの云うことがどの程度妥当するかは極めて疑問だといわねばならない]。

Table 4

Lambert Beluuard	2 a.	1st.	18 p.	7 1/2 ft.
Geoffrey Beluuard	2 a.	1st.	18 p.	2 1/2 ft.
Stephen Beluuard	2 a.	1st.	18 p.	6 1/2 ft.
Lambert, Geoffrey and Stephen Beluuard	5 a.	3st.		
Reginald Beluuard	5 a.	3st.		

第二の批判点は、“cum patre” と記されている場合には筆頭人の妻は死亡しているに違いないという点であった。これに対してハラムは、ラッセルの如く考えるならば、Weston では母が死亡していることが明らかな 14 例 [これはどのような根拠に基づいて判断したのか不明。筆頭人の妻の生死は筆者にはいかなる場合も決定できなかった。]に加えて、18 例 [20 例], 合計 32 例

で母がいないことになる。これは 54 例〔55〕中の 59.3% に相当する。Moulton では 85 例〔94〕中 31 例、明瞭に母を欠く 16 例を加えると 47 例、即ち 57.6% で母親がいないこととなる。一体このような高い母親の死亡率を考えることができるであろうか。〔恐らく *cum patre* の解釈についてはハラムが正しい。*cum patre* も、*cum matae* も、いかなる意味をもっているのか判明しない〕。

第三に、Spalding 戸籍は、子供が未成年かどうか、家にとどまっていたかどうかについて記すところがないのであるから、これらの子供がすべて父の家に同居していたと考えることは許されないという批判点。ハラムはこれら 3 カ村の戸籍のタイトルを見るならば、Spalding 戸籍に現われる子供は、Weston, Moulton の場合とは異なり、未成年者であることがわかるのだという。すなわち Weston の戸籍は「領主たる修道院長 J. の第 16 年、ウェストンにおけるその農奴らの調査」(*Inquisitio Nativorum Domini J. Prioris Anno XVI^{mo} in Weston*)、Moulton のそれは「領主たる修道院長のモウルトンにおける農奴に関し、その息子と娘について行なわれたる調査」(*De Filiis et Filiabus Inquisitio Habeta Nativis Domini Prioris in Multon*) というタイトルをもっており、Weston では領民全員について、Moulton では農奴の子供全員についての調査であることが明記されている。これに対し Spalding の場合には、「領主たる修道院長のスポールディング村における農奴の未成年の子供達の名前」(*Nomina Puerorum de Rusticis Domini J. Prioris in Villa Spaldingis*) とタイトルを附されており、この戸籍が父の家に留っている未成年の子供に関するものであることを知ることができると反論している。

第四の問題、これらの戸籍には富裕な者のみが現われており、代表的示例とは見做し難いのではないかという点について。ラッセルはこのように判断する根拠として、Weston では保有地規模の小さい *Sokemen* が 15% しか現われていないのに対し、より大きな土地を有する *Operarii* が 55.6% も出現していること、及び婦人が籍頭人になっている比率が低いことを反証としてあげている。先ず前者については、*Sokemen* と *Operarii* の家族規模を比較

するならば、両者に相違がないことがわかるし (Table. 5), 保有地規模別にこの戸籍に現われている状態を見ると、富裕な階層の者だけが特別に多く出現しているのではないことが明らかだ (Table. 6) と主張している。次に、婦人が戸主となっている割合が低すぎるという点について。これはラッセルが筆頭人として現われる場合のみを数えたからであり、死亡しているときにも父親が筆頭人となっているケースや、“cum matre” という表現で父が死亡している例をも含めるならば、婦人が戸主になっている比率はもっと高くなり、それはラッセルが欲している数値に著しく近いものとなると主張する。

Table 5

manor	no. of sokeman	household size	no. of operarii	household size
Spalding	54	4,87	19	5,63
Weston	15	5,53	10	3,9
Moulton	65	5,09	—	—
total	134	5,05	29	5,09

Table 6

manor	0-5 acre		5-30 acres		over 30 acres		total	
	no.	size	no.	size	no.	size	no.	size
Spalding	33	4,58	27	5,26	13	5,92	73	5,07
Weston	1	4,0	11	4,18	13	5,46	25	4,88
Moulton	12	3,67	34	4,57	19	6,89	65	5,09

Table 7

manor	no. of household with female heads	percentage
Spalding	7	6,19
Weston	14	25,93
Moulton	15	17,65
total	36	14,86

以上が本戸籍の解釈をめぐる論争のあらましである。恐らくその結論に関する限り研究史に立脚して議論を展開しているハラムの方が、真実により近いと筆者は考える。ラッセルが従来行なわれてきた豊かな研究史を殆んど参照することなく、論理的にのみ判断している点は注意する必要がある。しかし、ハラムの史料の取扱い方には、極めて重大な疑問点があり、ラッセルの批判に十分に耐えうるものとは思われない。では一体何故にハラムの反論は説得性をもちえないのか。思うにラッセルが批判している如く、これらの史料から農家構成員の実態を明らかにしようと信じたからである。ラッセルが一つの戸籍に2個以上の家族が含まれるのではないかという疑念を表明したのとは逆に、二つ以上の筆頭人グループで一戸の農家を構成したことも考えられるのではないかという疑問も生じる。こう考えるならば、土地を保有している息子が別個の戸籍筆頭人になっている場合も解釈に困難を生じない。(しかしいかなる場合にそう云えるかは判断の根拠がない。)この戸籍の目的とするところは、Moulton の場合に明記されているごとく、子供を有している者について、その子供が何処でいかなる生活を送っているかについて調査することにあつたと考えられる。とすれば、いかなる者を筆頭人とするかを決定する基準は必ずしも農家の戸主であるか否かによるものではない。だからこそ例えば Weston, no. 1, 2 の例のごとく、先ず William の息子として自ら何人かの息子を有すると一度記録されながら、再び今度は娘の父として筆頭人となって現われるという記載様式が見られるのではないのか。

いずれにしても本戸籍には農家構成員全員が記載されているのではない。筆頭人の妻、息子の妻、両親等が全然現われていないこと、兄弟、姉妹については Moulton, no. 12, 50, 87 の3例しか見出し出されないこと、非血縁者は一人たりとも出現していないこと、等についてハラムもラッセルも共にこれらの人々が現実に存在しなかったことを意味するものと考えている。しかし本当にそう云えるであろうか。ホームズズの裁判所記録を駆使した研究はこれらの人々が大多数の農家に包摂されていることを明らかにしているし、この史料自体によっても成年に達した後も土地を保有している兄弟と共に父母

の許にとどまっている人々が多数存在したことが判明するのであるが、彼らは戸主が父親から兄弟へと変化した後には今度は兄弟のもとにとどまっていたのではないのか。筆者はこれらの人々は記載対象からもれていると考えざるをえないのである。そしてこのことは、例えばわが国の宗門改帳などと比較した場合¹⁾、明らかなのではないだろうか。そしてこのことが正しいとするならば、当戸籍の史料的価値は著しく低いものと云わねばならない。しかし他方、有名なサン・ジェルマン・デ・プレ修道院の所領明細帳に比較すれば、はるかにすぐれているのである。所領明細帳にあっては、子供はその数と名前が記されるのみで、未成年なのかどうか、両親の許にとどまっていたのかどうかについて記すところは全くないのである。一例をあげておく。

Polyptyque de l'abbaye de Saint-Germain des Prés, Breve de Palatio, no. 74.

Acmirus colonus et uxor ejus colona, nomine Acledrudis, homines sancti Germani, habent secum infantes v, his nominibus, Aclemundus, Israhel, Ardulfus, Elisam, Daniel. Tenet mansum ingenuilem I, habentem de terra arabili bunuaria II, de vinea aripennum I, de prato aripennum I; excepto habet de terra arabili bunuaria IV. Inde facit perticas VI, et solvit denarios IV²⁾.

当戸籍は様々の限定を附さなければ農家構成について利用することが出来ないが、子供の総人数、成年者と未成年者の割合(但しこの区別の基準は不明)、成年に達した後何処でいかなる生活を送っているのかというような点のみは詳細に知らしめてくれる。極めて不満足なものではあるが、しかしこれ迄この種の史料が全く見出されなかったことを考慮するならば、たとえ僅かであっても封建社会の農家の実態についての手懸りが与えられた点のみを以て、一先ずハラムの発見に感謝する他はない。

1) 新見吉治著、「壬申戸籍成立に関する研究」。昭和34年。

2) *Polyptyque de l'abbaye de Saint-Germain des Prés, rédigé au temp de l'abé Irminon. Publié par Longnon, tome II, texte de polyptyque, p. 20.* なお横川一朗、「北フランス古典荘園の基礎構造、—パリ・サン・ジェルマン・デ・プレ修道院所領明細帳の分析を中心として—」。東京都立大学、人文学報、第17号参照。

凡 例

1. 以下の史料は British Museum, Additional Manuscripts, 35296, fols. 222~224, 209~212 に含まれている。
2. Weston, Moulton, Spalding の三史料中 Spalding のそれは子供の性別と人数、名前を記しているにすぎないため、史料的价值が低いので、Weston と Moulton のもののみを印刷する。
3. 各戸籍に通し番号を附した。ただし同一人が二つの戸籍筆頭人として現われる場合が、Weston no. 54, 55 及び Moulton no. 31, 32 に見える。
4. 省略されている文字は可能なかぎり補った。但し英語形で用いられている場合、すなわち地名 (Spalding, Weston, Moulton 等) 及び姓 (例: Weston no. 18, Robertus *Harding*, no. 19, Ricardus *Newcomer* 等) は英語形で表記した。
5. 判読不能な文字が Weston, no. 4, Moulton no. 47, 49 にある。*印で示される。
6. 意味不明の語として Weston no. 54, uestsinens, Moulton, no. 29, pilios がある。イタリックで示される。
7. 文法的に疑問と思われるものはその部分がイタリックで示される。(例: Moulton no. 1, transmarinís).
8. 筆頭人の名前の次に habet 或いは habuit が続き、次いで息子或いは数の数が示され、その後に多くは videlicet として、彼らの名前がくる。その格は普通主格形をとるが、時に対格形の場合がある。対格形の部分はイタリックで示される。しかも同一戸籍中でも主格形と対格形が混用されていることもある (Weston no. 4 etc.)。このような場合省略された部分について主格形か対格形かを判断できないときには省略されたままで示される。
9. habet と habuit のそれぞれがいかる場合に使用されているかは不明である。habuit を過去のことがらと解釈し、戸籍作製当時には父 (或いは母) は死亡したと考えると、“cum patre” が意味不明となる (例: Weston no. 8, 15 etc)
10. 最後に一覧表を附した。

Inquisitio Nativorum Domini J. Prioris
Anno XVI^{mo} in Weston.

(British Museum, Additional Manuscripts, 35296 fols. 222-224)

fol. 222

- 1) Willelmus filius Ranulphi habuit iv filios viz. Walterus, Hugo, Ranulphus et Alricus et viij filias viz. Emecina, Izabella, Elena, Aluma, Beta et Emmam. De quibus Walterus et Alricus fuerunt monachi et Hugo habuit unum filium Willelmus nomine qui *abucit* transmarinus et unam filiam Elena nomine quae est vacabunda: Ranulphus habuit duos filios; de quibus Ricardus est clericus ordinatus et Thomas est in Holbech cum matre sua. De filiabus Emma (Emecina ?) est desponsata in Spalding; Alicia et Beta sunt desponsatae in Multon et Emma et Lucia sunt desponsatae in Weston.
- 2) Item dictus Ranulphus habuit iij filias viz. Elena, est desponsata in Multon; Emma et Maria, ij sunt parvuli cum matre.
- 3) Hugo Cli' habet duos filios et unam viz. Alanus qui est clericus ordinatus; Ranulphus et Agnes, sunt parvuli cum matre.
- 4) Robertus filius* Willelmi habet iij filios Willelmus, Hugo et Ranulphus; Willelmus habuit unum filium Willelmus nomine qui est transmarinus et iij filias viz. Kuma et Alicia quae sunt in Quaspelad et Alicia est desponsata et Kuma est vacabunda; Hugo est mortuus et Ranulphus est ad Hantebarg: dictus Robertus habuit iij filias viz. Emecina, Luce et Elizabetha; Luce fuit desponsata in Gonberchurch et Emecina in Weston; Elizabetha in Multon.
- 5) Hugo filius Roberti habuit duos filios viz. Robertus qui est monachus de Spalding et Henricus manens in Norfolk et v filias viz. Emmam, fuit desponsata in Weston; Lucie et Elena, fuerunt desponsatae in Quadering; Alimicia, est desponsata in Quaspelad et Johanna, in Weston.
- 6) Alanus filius Hastini habuit unam filiam Matilda nomine quae est desponsata in Multon.
- 7) Hulto Ciot habuit iv filias Matilda et Alica, Margareta et Emmam, sunt cum matre.

- 8) Willelmus Harding habuit unum filium et unam filiam viz. Galfridus qui est cum patre et Agatha, est desponsata in Spalding.
- 9) Nigellus filius Herberti habuit unam nomine Matilda quae est desponsata in Weston.
- 10) Ranulphus filius Willelmi habuit duas filias viz. Emmam et Matilda; Emmam fuit desponsata in Weston et Matilda habuit unam filiam Ulumam nomine quae est in Weston.
- 11) Thomas de Norfolc habuit duos filios Willelmus et Ranulphus qui habuit terram et unam filiam Agnes nomine quae est desponsata in Multon.
- 12) Ranulphus Baret habuit iij filios viz. Hugo, Willelmus et Siwardus; Hugo est dare de Golwills' et Siwardus est canonicus et iiij filias viz. Marioram, Emecinam et Elenam, sunt desponsatae in Spalding et Hillara, est desponsata in Weston.
- 13) Johannes Wisman habuit duos filios et duas filias viz. Thomas et Ricardus, tenent terram; Bete, est desponsata in Spalding et Elena, vacabunda.
- 14) Simon Osbern habuit duos filios Johannes et Thomas; Johannes tenet terram et Thomas est vacabundus et unam filiam Agnes nomine quae est desponsata in Weston.
- 15) Johannes filius Osberni habuit duos filios et unam filiam viz. Ricardus et Willelmus et Agnes qui sunt cum patre.
- 16) Hugo filius Agnae habuit duos filios et duas filias viz. Willelmus et Hugo, Emecina et Alice; de quibus Emma est desponsata in Weston et alii sunt cum matre.
- 17) Alricus de Viridar habuit iij filias viz. Elena, Sarra, sunt desponsatae in Weston et Kuma, in Multon.
- 18) Robertus Harding habuit iij filios viz. Herbertus, tenet terram; Ranulphus, est clericus ordinatus et Lambertus, vacabundus et duas filias Alice et Elen; Alice est desponsata et Elen cum matre.
- 19) Ricardus Newcomer habet iv filios viz. Hugo, Robertus, sunt prioris tenentes; Thomas et Simon sunt vacabundi et unam filiam Crae, est transmarinus.
- 20) Hugo filius Ricardi habet unum filium et unam filiam viz. Robertus et Elen qui cum patre.

fol. 223

- 21) Herbertus filius Bettæ habuit duos filios, Willelmus, tenet terram et Henricus, est mortuus et iij filias viz. Juetta et Emilia, sunt desponsatæ in Spalding et Hillara, est in Gosberchirch.
- 22) Willelmus filius Herberti habuit duas filias viz. Agnes et Emma, parvuli cum patre.
- 23) Ringolfus filius Emmae habuit duas filias viz. Emma et Agnes qui tenent terram.
- 24) Hugo Sinant habuit v filios viz. Willelmus, Gilbertus, Galfridus, Robertus et Stephanus; Robertus est clericus ordinatus et est transmarinus et alii sunt cum patre.
- 25) Simon Sinant habuit unum filium et vj filias viz. Gilbertus et Agnes, Bete, Elen, Emma, Matilda, Alice et sunt cum patre.
- 26) Ranulphus Bele habuit duos filios et unam filiam viz. Willelmus et Gilbertus qui est manens in Pincel'.
- 27) Willelmus Belo habuit unam filiam nomine Asilia, manens in Weston.
- 28) Gilbertus Bele habuit unum filium nomine Herbertus qui est cum parte et duas filias Agnes et Agatha; Agnes est desponsata in Weston et Agatha est cum patre.
- 29) Willelmus Benne habuit tres filios et unam filiam viz. Alricus, Gilbertus et Robertus et Kuma; Alricus tenet terram, Gilbertus et Robertus sunt vacabundi et Kuma est cum matre.
- 30) Alricus Benne habuit unum filias viz. Gilbertus, Emma et Matilda qui sunt parvuli cum patre.
- 31) Reginaldus filius Margaretæ habuit iij filios viz. Alricus, Gilbertus qui est clericus ordinatus et v filias viz. Margareta, Bete, Agnes, Izabella et Emma et omnes sunt cum patre.
- 32) Thomas Agge habet unum filium et duas filias viz. Gilbertus et Sinant, sunt cum matre et Emana, vacabunda in Suffolc.
- 33) Herbertus Bette habuit unum filium et duas filias viz. Endo, Emecina et Agnes et omnes sunt cum matre.
- 34) Agnes filia Herberti habuit unum filium et duas filias viz. Matilda et Emma.
- 35) Willelmus Fittæ habuit unum filium et duas filias viz. Hugo, Emma et Bete et omnes sunt cum matre.

- 36) Gregorius filius Emmae habuit iij filios et duas filias viz. Nigellus, Adam et Hugo, est transmarinus et alii *** sunt pastores brevi (brecae?); Emecina et Izabella sunt cum patre.
- 37) Gilbertus Hare habuit unum filium Alricus nomine qui tenet terram et iij filias viz. Lecia, est desponsata in Spalding et Siteriche, est in Multon et Basilia, est cum patre.
- 38) Ringolfus Newcomer habuit iv filios viz. Robertus, Galfridus, Gilbertus et Gregorius; Robertus tenet terram, Galfridus et Robertus similiter et Gilbertus est manens in Spalding.
- 39) Galfridus Ringolf habuit unum filium Gregorius nomine et est cum patre et tres filias viz. Matilda, Lucia et Alimia; Matilda est desponsata in Helpringham; Lucia in Spalding et Alimia in Quaspelade.
- 40) Gregorius Ringolf habuit tres filias viz. Emma, est desponsata in Halbech; Alcusa in Weston et Emma est cum patre.
- 41) Hugo de Draud habuit iij filios et unam filiam viz. Thomas, Robertus et Nigellus et Emmam qui omnes sunt parvuli cum patre.
- 42) Regubakdus Haldem habuit vj filios viz. Thomas, Willelmus, Robertus et Nigellus, Alanus, **** et tres filias Agnes, Aluma et Matilda et sunt cum patre.
- 43) Simon Leffem habuit duos filios et unam filiam viz. Willelmus, Nicholaus, sunt vacabundi et Bete, est desponsata in Spalding.
- 44) Ricardus Faber habuit duos filios viz. Gilbertus et Alricus et iij filias viz. Matilda, est desponsata in Suiflet' et Emecina, est vacabunda et Elen, cum matre.
- 45) Gilbertus filius Margaretæ habuit iij filios Ranulphus, Robertus et Willelmum et iv filias Agnes, Margareta, Ameram et Emmam qui sunt parvuli cum patre.
- 46) Willelmus Billere habuit iiij filios viz. Willelmum, Petrum, Gilbertum et iij filias viz. Aluma, Alicia et Agnes qui omnes sunt cum patre.
- 47) Walterus filius Roberti habuit v filios viz. Willelmum, Stephanum, Robertum, Willelmum et Esichonum et unam filiam Luciam nomine et omnes cum eo.
- 48) Willelmus filius Matildæ habuit iv filios viz. Seman', tenet

- terram; Alricum, Hugonem et Lambertum et sunt cum matre et unam filiam Elenam nomine et est desponsata in Weston. Item Seman habet unum filium nomine Robertum.
- 49) Alricus filius Roberti habuit duos filios viz. Nicholaum et Gilbertum, tenent terram et duas filias viz. Alimia desponsata, est in Spalding; Ulruma, in Multon.
- 50) Ranulphus Granus habuit unum Reginaldum nomine qui est clericus ordinatus et duas filias viz. Elena, est desponsata in Spalding et Lucia, cum matre.
- 51) Alanus filius Ingelli habuit duas filios et iij filias viz. Jacob' et Willelmum, Alic' et Margarj et omnes sunt cum matre.
- 52) Hugo filius Ingelli habuit iij filios et duas filias viz. Stephnum, Gregorium, Willelmum et Luc' et Agn', sunt cum patre.
- 53) Lambertus Kiton habuit unum filium et duas filias viz. Gilbertum et habet unum filium Johannem nomine et Agnn', sunt vacabundae (sic).
- 54) Edricus filius Roberti habuit iv filios viz. Nicholaum qui est canonicus be Markby; Lambertus, est uestsinens; Galfr', est carpenter apud Loddon et Willelmus, tenet terram et habuit unum filium et unam filiam viz. Thom' et Marg'.
- 55) Idem Edricus habuit iij filias viz. Luce et Sarra, sunt desponsatae in Spalding et Lemiria, est desponsata in Weston.
- 56) Reginaldus Agge habuit duos filios et unam filiam viz. Petr', Gregor' et Elena et sunt cum patre.

De Filiis et Filiabus Inquisitio Facta Nativis
Domini Prioris in Moulton.

(British Museum, Additional Manuscripts, 35296, fols. 209-212)

fol. 209

- 1) Willelmus Geri habuit vj filios et duas filias viz. Ranulphus, Alexander, Thomas, Robertus, Adam et Petrus qui omnes sunt tenentes vestri pre'. Adam et Petrus ij sunt transmarinis et ordinati et duae filiae desponsatae fuerunt in Eispelad.
- 2) Ranulphus Geri habet tres filios viz. Adam, Thomas, Nigellus et unam filiam Emma nomine qui omnes sunt cum patre.
- 3) Robertus Geri habet v filios viz. Alexander, Willelmus, Thomas, Adam et Nigellus et iij filias viz. Lucia, Emma, Dammella qui omnes sunt cum patre.
- 4) Adam Dimolus habuit iv filios viz. Alexander, Simon, Henricus et Willelmus et v filias viz. Christiana, Emma, Lucia qui omnes sunt cum matre. Lucia est desponsata extra feodo.
- 5) Alexander Daniel habuit ij filios Adam et Johannes qui est ordinatus et unam filiam Helewisa qui omnes sunt cum matre.
- 6) Willelmus Keterme habet unum filium Johannes nomine et unam filiam Laurota nomine et sunt cum patre.

fol. 210

- 7) Alanus Keterme habet unam filiam nomine Helewisa et vacabunda.
- 8) Thomas filius Lemue habet v filios viz. Eonanus, Willelmus, Ricardus, Simon et Gilbertus et tres filias viz. Agnes, Praedoma et Ada qui sunt parvuli et sunt cum patre.
- 9) Willelmus Idame habet unum filium Alexander et unam filiam Agnes nomine et sunt pueri.
- 10) Alexander Idame habet duos filios viz. Willelmus et Rogerus et sunt pueri.
- 11) Rogerus Idame habet duos filios viz. Ricardus et Alexander et unam filiam Agnes nomine et sunt pueri.
- 12) Nigellus Arlward habet duos filios viz. Nigellus et Gilbertus et duas filias viz. Sarra et Lucia et habet sororem Sarra nomine.
- 13) Adam filius Simonis habet vj filios viz. Ricardus, Hugo, Alanus,

- Simon, Lambertus et Nigellus et tres filias viz. Sarra, Emma et Emecina et cum patre.
- 14) Johannes filius Gilberti habet unum filium Radulphus nomine et unam filiam Emma nomine et sunt parvuli cum patre.
 - 15) Galfridus filius Petri habet unum filium et unam filiam viz. Radulphus et Elianor, parvuli cum patre.
 - 16) Lambertus filius Petri habet unam filiam Lucia nomine.
 - 17) Gilbertus filius Simonis habet duos filios viz. Lambertus et Robertus et quatuor filias viz. Emma, Sarra, Johanna et Margareta, sunt parvuli cum patre.
 - 18) Ranulphus filius Alexanderi habet duos filios viz. Simon et Reginaldus et tres filias viz. Sarra, Beca et Margareta et sunt parvuli cum patre.
 - 19) Warinus de Hardewell habet duos filios viz. Johannes et Alanus et duas filias viz. Hellewisa et Emma et sunt parvuli cum patre.
 - 20) Adam Geri habet unum filium Nigellus et duas filias viz. Agnes et Lucia.
 - 21) Thomas Geri habet vj filios viz. Simon, Walterus, Ranulphus, Gilbertus, Adam et Willelmus et unam filiam Agnes nomine.
 - 22) Baldiwinus Gerald habet duos filios qui sunt breves tenentes.
 - 23) Hugo Ent habet unum filium et unam filiam Petrus et Elena.
 - 24) Ricardus Ent frater eius manens in Spalding.
 - 25) Simon Ent est vacabundus.
 - 26) Petrus filius Emmae habuit iij filios et iij filias viz. Herbertus, Johannes, Ricardus; viz. Emma et Agnes, sunt desponsatae et Marie, est cum matre.
 - 27) Johannes Rob' habet duos filios viz. Lambertus qui est clericus ordinatus et Hugo et tres filias viz. Kuma, Agnes et Emecia, est vacabunda manens in Stamford.
 - 28) Willelmus filius Roberti est capellanus manens apud London.
 - 29) Petrus frater eorum habet uxorem et *pilios* apud London.
 - 30) Hugo Gere habet unam filiam viz. Elia nomine et est cum patre.
 - 31) Lambertus filius Reginldi habet v filios viz. Robertus, Reginaldus, Johannes, Robertus et Robertus. Item Robertus habet unum filium Thomas nomine. Item alius Robertus habet unum

- filium Lambertus nomine et unam filiam Matilda nomine. Item Reginaldus habet duos filios viz. Wigotus et Walterus.
- 32) Idem Lambertus habet iij filias viz. Matilda et Emma, sunt desponsatae in Multon super feodum domini Thomae de Multon et Beta, est desponsata super feodum vestrum in Multon.
- 33) Galfridus Helle habet duos filios Johannes et Hugo et sunt parvuli cum patre.
- 34) Hugo Helle reliquit feodo prioris et habet unum filium Galfridus nomine et j filiam Elianor, cum patre.
- 35) Johannes Helle reliquit prioris et habet unum filium Hugo et ij filias Emma et Margareta, vacabundae.
- 36) Gilbertus de Pinceli habet duos filios Thomas et Conanus et duas filias Beta et Christiana, cum patre.
- 37) Rogerus Boliscon habet iv filios Thomas, Henricus, Willelmus, Thomas et sunt cum patre.
- 38) Walterus Boliscon habet duas filias Luce et Christiana et sunt parvuli cum patre.
- 39) Galfridus Boliscon habet unum filium Rogerus nomine et tres filias Helesisa, Lamota et Lucia et sunt parvuli cum patre.
- 40) Walterus Haldem habet unum filium Galfridus nomine et iv filias viz. Agnes, Editha et Hillara et sunt desponsatae in Eispelad et Izabella, cum patre.
- 41) Algerus Haldem habet duos filios viz. Robertus et Simon, tenent terras et duas filias Beta et Emma et sunt vacabundae.
- 42) Willelmus filius Betae habet duos filios Galfridus et Herbertus et unam filiam Emma nomine.
- 43) Thomas filius Willelmi manens in Eispelad et habet unum filium Willelmus nomine.
- 44) Hugo filius Ulfi habet unum filium Thomas nomine et tenet terram et tres filias viz. Beta, Elena, Agnes et sunt cum matre; Beta est desponsata.
- 45) Thomas filius Thomae habet unam filiam Cunna nomine, parvula.
- fol. 211
- 46) Galfridus Gere est bastard et habet unum filium Hugo nomine et iij filias viz. Agnes, Matilda et Margareta, manent in libero feodo domini Thomas.

- 47) Willelmus frater *** Galfridi est bacabundus in Multon.
- 48) Willelmus Crombis venit ad terram et habuit duos filios viz. Willelmus qui reliquit terram et Galfridus, tenet terram cum matre et duas filias Emecina nomine et Emma et sunt cum matre.
- 49) Alanus **** et Willelmus frater eius tenent terram.
- 50) Hugo Minol et Gregorius frater eius tenent terram et habuit tres sorores viz. Matilda, Margareta et Emma, est desponsata in Spalding.
- 51) Thomas Erick habet duas filias viz. Julietta te Emma et sunt vacabundae.
- 52) Galfridus Erick tenet terram.
- 53) Reginaldus Beliwald habet iij filios viz. Lambertus, Stephanus et Willelmus et duas filias viz. Emma et Beta et sunt cum patre.
- 54) Stephanus Beliwald habet iv filios viz. Gregorius, Godefrus, Johannes et Ricardus et sunt cum patre.
- 55) Lambertus Beliwald habet unum filium et unam filiam viz. Anderus et Emma et sunt parvuli cum patre.
- 56) Rogerus Godisman habet duos filios et unam filiam viz. Alanus, Herbertus et Agnes et sunt vacabundi.
- 57) Walterus filius Emmae habet unum filium et iv filias viz. Lambertus, Elena, Matilda et sunt cum patre et Matilda, est desponsata.
- 58) Reginaldus filius Herberti habet tres filios viz. Johannes, Rogerus et Thomas et ij filias scilicet Agnes et Beta et sunt cum patre.
- 59) Adam filius Herberti habet v filios viz. Simon, Thomas, Johannes, Alardus et Willelmus et duas filias viz. Emma et Agnes, sunt parvuli cum patre.
- 60) Willelmus filius Nigelli habet iij filios viz. Thomas, Petrus et Lambertus et iij filias viz. Izabella, Sarra et Emma et sunt parvuli cum patre.
- 61) Thomas filius Nigelli habet ij filios (sic) viz. Nigellus et Izabella, sunt parvuli cum patre.
- 62) Rogerus Riche habet unum filium Thomas nomine et iij filias viz. Izabella, Julietta et Alima et sunt parvuli cum patre.

- 63) Riclund habet unam filiam nomine Elewisa et est desponsata.
- 64) Galfridus Siwat habet duos filios viz. Herbertus et est clericus ordinatus transmarinus.
- 65) Thomas et Lucia sunt cum matre.
- 66) Bartholus filius Warani est capellanus manens apud Lennan.
- 67) Alanus filius Gutherami habuit duos filios Johannes et Rogerus et duas filias viz. Matilda et Agnes, omnes sunt cum matre.
- 68) Dametus Belliwald habet duos filios et unam filiam viz. Hugo, Petrus et Matilda qui omnes sunt cum matre.
- 69) Emma Baldwin habet tres filios viz. Willelmus, Ricardus et Willelmus et omnes sunt cum matre.
- 70) Gregorius Vineri habet duos filios viz. Johannes et Adam et tres filias viz. Bete et Agnes, sunt desponsatae; Adam et Emma sunt cum patre.
- 71) Johannes filius Gregorii habuit duas filias viz. Agnes et Matilda et unum filium Thomas nomine et sunt cum patre.
- 72) Adam filius Gregorii habet tres filios viz. Robertus, Willelmus et Johannes et tres filias viz. Matilda quae est desponsata; Hillara et Agnes, sunt cum patre.
- 73) Thomas filius Gregorii habet unum filium et duas filias viz. Robertus et Christiana et Alicia et sunt cum matre.
- 74) Willelmus filius Gregorii habet unum filium et unam filiam viz. Ricardus et Matilda et sunt parvuli cum matre.
- 75) Simon de Alstondic habuit v filios viz. Adam, tenet terram; Hugo, reliquit feodo prioris; Thomas et Willelmus, sunt cum matre et Ricardus, clericus ordinatus et sunt Ric' de Multon. Item habuit iv filias viz. Agnes et Emma et Izabella, sunt desponsatae super feodo domini prioris.
- 76) Galfridus Belliward habuit duos filios et unam filiam viz. Gregorius et Lambertus et Anicia et sunt parvuli cum patre.
- 77) Ricadus filius Simonis habet iij filios viz. Jacob, Galfridus et Hugo et unam filiam quae est desponsata in Weston extra feodo.
- 78) Lucia Cut' habet unum filium Herbertus nomine et manens in Spalding.
- 79) Herbertus filius Simonis habuit iij filios viz. Thomas, Rogerus et Gilbertus et duas filias scilicet Agnes, item Margareta, sunt